

Title	トノサマガエル臓器の組織学的研究(第2報)
Sub Title	Studien ueber histologische Untersuchung von Rana nigro-maculata
Author	桜井, 久一(Sakurai, Kyuichi) 黒須, 恵美子( Kurosu, Emiko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1956
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.2 (1956. ) ,p.36- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Technical Report
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000002-0036">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000002-0036</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## トノサマガエル臓器の組織学的研究(第2報)

桜井久一, 黒須恵美子

Kyuichi SAKURAI, Emiko KUROSU: Studien ueber histologische  
Untersuchung von *Rana nigro-maculata*

## 脾臓 (Milz, Lien) (Fig. 1 参照)

脾臓は人類に於ては左季肋部にあるが蛙では腹部の中央に近く暗紅色の小球状をなしている。その機能は人間と同一で赤血球の破壊または生成に関係している。その組織は淋巴組織で幾つかの葉に分れ赤白血球が充満している。血管の出入も多い。

## 膵臓 (Pancreas) (Fig. 2 参照)

消化腺であり内分泌腺であること人間と同一で胃の後面にある。組織学的に膵細胞の集団で消化分泌物はその中央を走る膵管に集まり十二指腸に注いでいる。内分泌は Langerhans 氏島の柱状細胞より分泌され Insulin であること人間と同一である。

## 胆嚢 (Vesica fellae, Gallenblase) (Fig. 3 参照)

胆嚢は肝細胞の分泌物即ち胆汁を貯えて置く嚢で肝臓の下面に附着し青褐色で薄壁の嚢である。外表は漿膜、筋層は薄く粘膜は柱状の細胞で粘液を分泌する。

## 脳下垂体 (Hypophysis) (Fig. 4 参照)

脳下垂体は蛙に於ても前葉、中葉、後葉の3部から出来ている。前葉は腺組織で柱状の細胞であり分泌顆粒が見られる。後葉は主として神経組織で、中葉は後葉の中間に位する狭い部分である。

生殖系統が時期により發育状態を異にしていることは当然で毎年3月上旬頃最もよく成熟する。雌の生殖腺は卵巣、卵管即ち Mueller 氏管及子宮の3つが主要部分であり、これに卵巣全体を包む薄い腹膜特に卵巣腹膜 (Mesovarium) と称せらるるものにより被われ背部腹壁に固着している。卵巣と Mueller 氏管とは直接接続することなく Mueller 氏管は極めてよく発達し上部は細く下部に行くに従い次第に太くなりその上端は肺臓下面に開口している、その部分を特に腹腔口と云い人間ではその部分に剪采がついている。卵管は迂余曲折し下部に至るに従い著しく膨大し子宮となるも、子宮は唯卵子の貯蔵所たるに過ぎない。卵巣内の卵子が成熟すると一度腹腔内に落ち1種の趣向性により卵管腹腔口に達しその周囲にある繊毛により内部に吸い込まれ卵管を下行しつつ、その周囲より分泌される粘液に包まれ総排泄腔に集まり一塊となり産出される。

雄の生殖腺は精巣でこれを包む薄い腹膜即ち精巣網膜及精巣から出る出精管が主なるものであり、掌状の脂肪体がこの附近にあること雌と同一である。注目すべきは出精管が網の目状を存し腎臓に入り腎小管に開口することで精子は一度腎皮質の Malpighi 氏体に入り輸精管を経て総排泄腔に達することである。この点高等動物とその機能を異にするのでかくの如き尿管を特に Wolff 氏管と称する。なお Mueller 氏管は雄に於ては退化して見ることが出来ない。

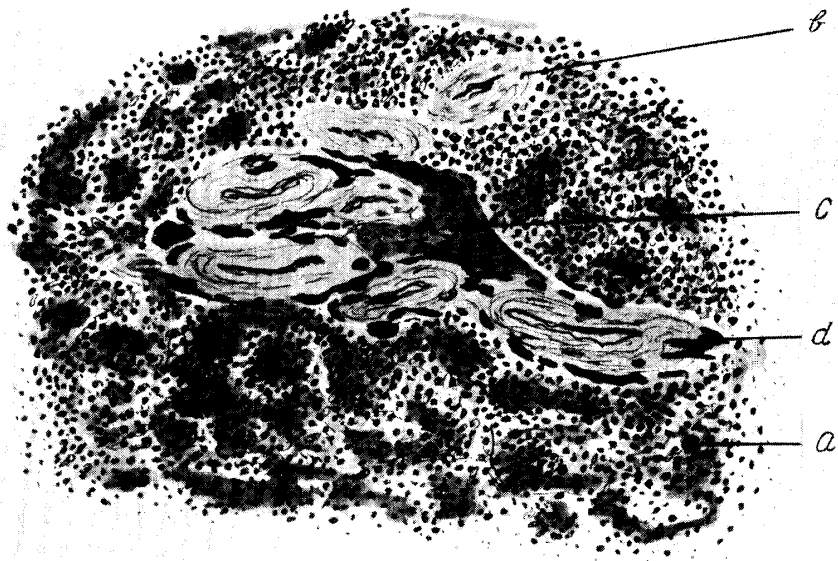


Fig. 1 脾 臟 断 面

- a) 淋 巴 組 織
- b) 動 脈
- c) 静 脈
- d) メラニン色素

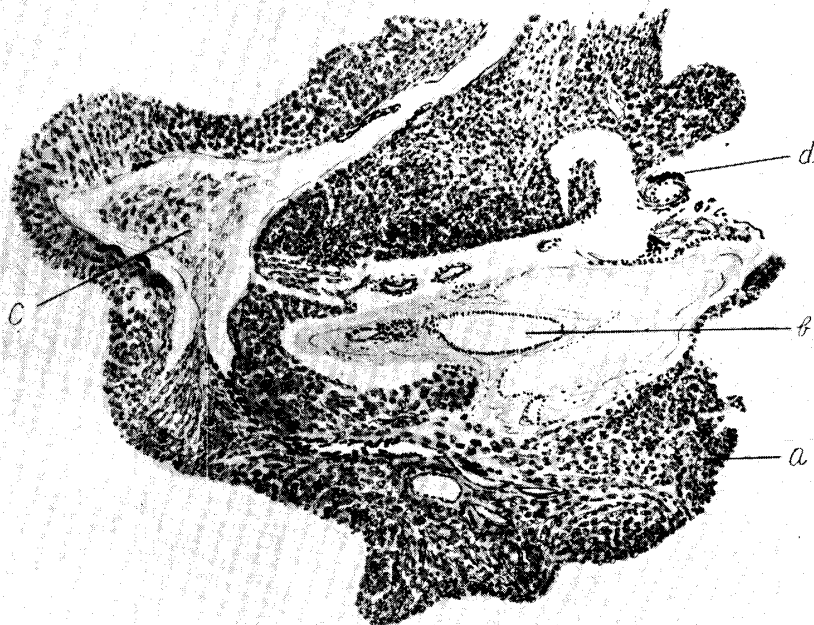


Fig. 2 脾 臟 断 面

- a) 脾 臟 細 胞
- b) 脾 管
- c) 血 管
- d) 色 素 (メラニン)

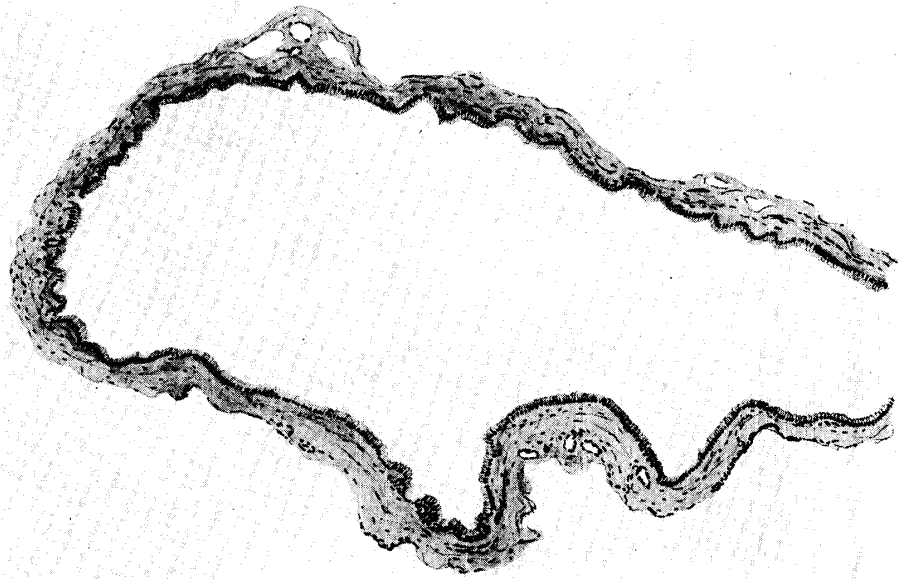


Fig. 3 胆 囊 断 面

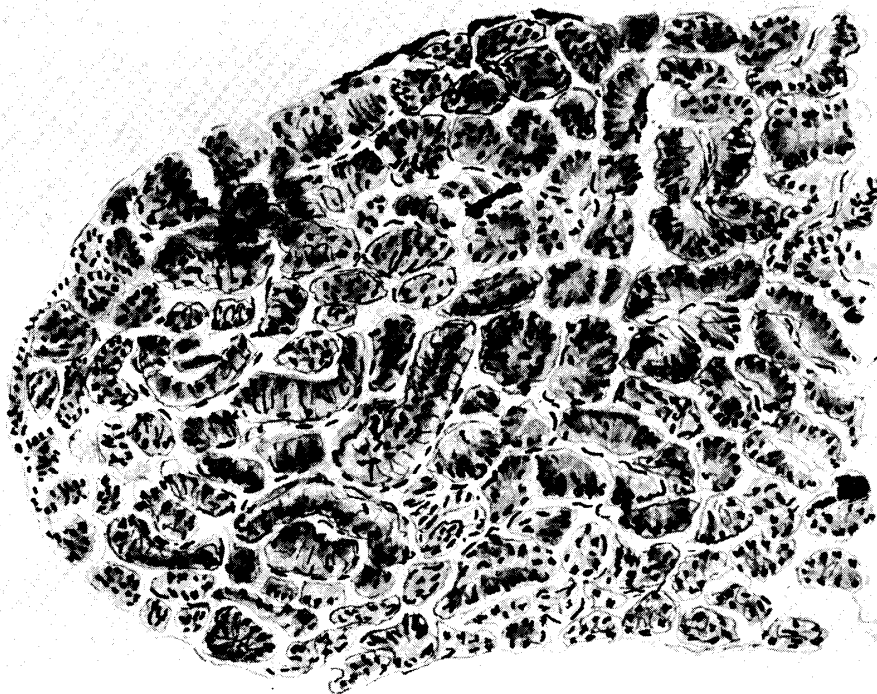


Fig. 4 腦下垂体前葉断面  
(多数の腺細胞を見る)

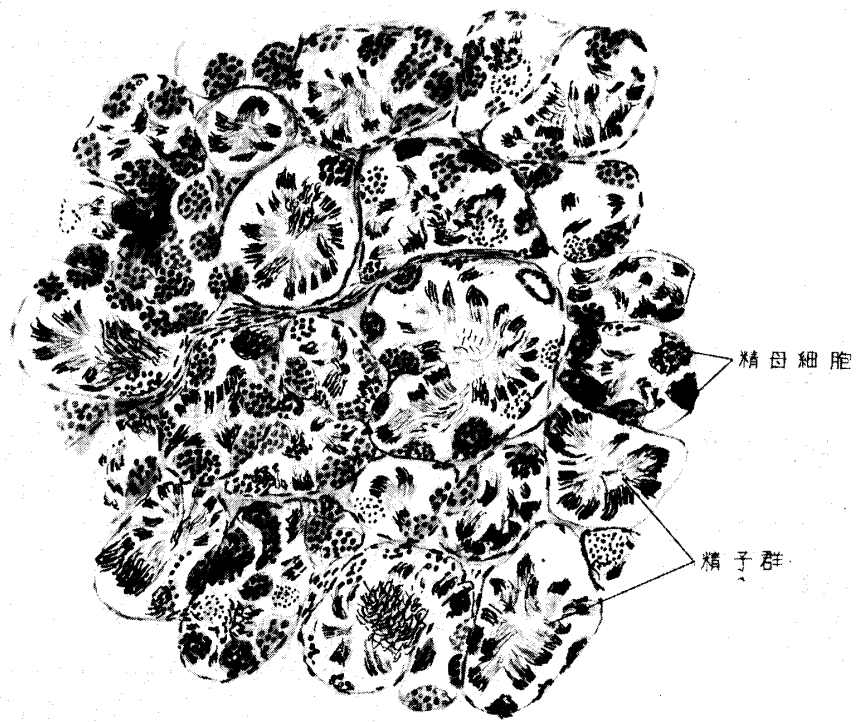


Fig. 5 精 巢 断 面  
(種々なる发育阶段にある精子)

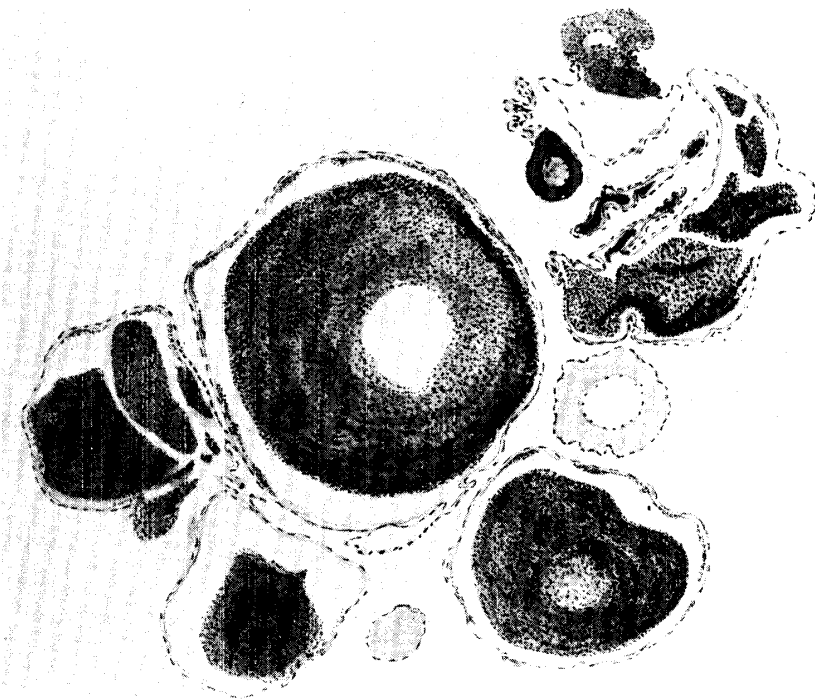


Fig. 6 卵 巢 断 面  
(種々なる发育阶段にある卵子)

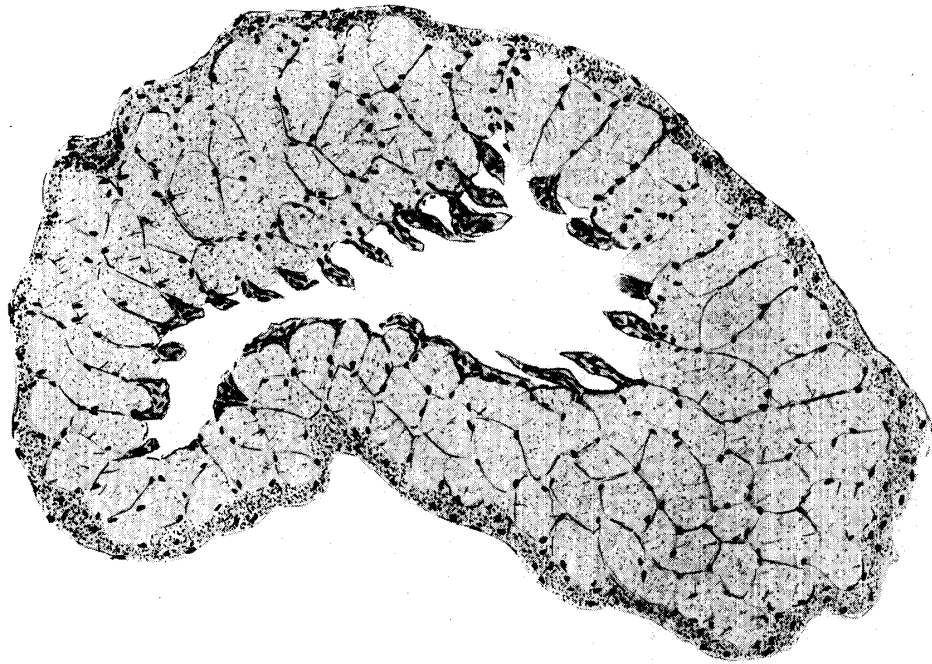


Fig. 7 卵 管 上 部



Fig. 8 卵 管 下 部

組織学的に精巣は精巣網膜に包まれているがこの膜は漿膜 (Tunica serosa) と卵白皮 (Tunica albuginea) の2層から出来ている。その内部は1種の複合管状腺で精細管は固有膜 (Membrana propria) に包まれた厚い壁の管で出精管に開いている。精細管壁の細胞を精細胞と云い多くは塊をなすも孤立するとき特に精原細胞 (Spermatogonia) と云う。精原細胞は第一次精母細胞 (Spermatocyt), 第二次精母細胞と發育し最後に精子となる。

以上の外 Sertoli 氏細胞は栄養細胞で大型で円い泡状核を有し、間細胞 (Interstitial cell or Leydig 氏細胞) は小葉の結合組織で大きな原形質にとんだ細胞群で内分泌作用をすると云われること人間と同一である。

卵巣網膜は漿膜と内上皮から出来て広い卵巣腔を形成し、その卵巣壁から色々の發育過程にある卵が沍胞細胞に包まれて卵巣壁の中に飛び出している。今一つ同大の卵原細胞もこの卵巣壁から飛び出しているがこれは卵に發育するかまたは沍胞細胞に分化して卵を包む様になる。

(Fig. 5, 6, 7, 8 参照) (以下次号)

## 猫の好きな植物 (第1報)

桜井久一, 野村恒子

Kyuichi SAKURAI, Tsuneko NOMURA: Ueber die  
Katze betäubende Pflanzen.

### 緒言

マタタビ *Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Maxim. はマタタビ科 Actinidiaceae の植物で我が国山野に広く自生する。マタタビが古来猫の大好物として知られ、その万病に効くと云われているが、その他の好きな植物として Gentianaceae のセンブリ *Swertia japonica* (Schultes) Makino, Valerianaceae のカノコサウ *Valeriana Fauriei* Briquet, Orobanchaceae のオニク *Boschniakia rossica* (Cham. et Schltldl) Fedtsch. et Flerov. などがあげられる。勿論マタタビがその第1位であるが、多かれ少なかれ共通の反応を示し、他の植物に対するのと異なり、その植物にひきつけられ根を掘つたり或は与えたと躍りかかつて指先よりうばい、くちやくちやに噛みちらして異常な興奮振りを示す。

センブリは雑誌 "遺伝" (29年10月号) に "猫にセンブリ" と題して遺伝学研究所長小熊捍氏により、"マタタビと同様異常な興奮振りでセンブリをなめたり嗅いたりして鼻や頬にこすりつけ、果はその上に寝ころがって眼を細くする" と書かれてあるほか、筆者等の一人野村も植物標本作成中に、多くの植物の中よりセンブリを抜き出された経験を持ち、同様の反応を示している猫を見たことがある。

吉草は同じく "遺伝" に "マタタビと同様の現象が *Valeriana* にもみられる" と記されており、またこれを粕壁薬草園で栽培したところ、その根を猫に掘られて困ると言っていた。市販吉草根を猫にあたえたところ、よだれを流してマタタビと同様の反応を示した。

オニクもまた古くから猫の好きな植物として知られ、色々の本の植物の記載の中に出て来る。